マンガにおける「女ことば」
――女性文末詞の使用に着目して――

北 代　朋 子

1. はじめに

現代日本語には、いわゆる「男ことば」や「女ことば」と解釈される性差をマークする表現が存在しており、我々はそれらの表現から自然に性差を読み取ることができる。性差はとりわけ文末詞に顕著にあらわれるとされるが、現代の自然会話においては、特に女性専用形式とされる文末詞は衰退し、ことばの男女差は縮小しているとの指摘がある。それら女性専用形式の文末詞の中には、若い世代の女性の間ではほぼ使われることがなく「死語」とさえ言われるものも存在している。しかしながら、現実の自然会話におけることば使いと比較して、ドラマやマンガや小説といった「フィクションの世界」におけることば使いはどうであろうか。作中の若い女性登場人物たちが「～わ」「～かしら」等、いわゆる「女ことば」の範疇にあると考えられる文末詞を使用して会話していることはめずらしくない、というところが実感である。

本研究は、女性専用形式の文末詞の使用に関して、自然会話とフィクション作品の会話の間にこのような乖離が認められることに着想を得た。具体的には、ドラマ作品に出現する女性専用形式の文末詞（以下、女性文末詞と呼称）の使用について研究した水本他（2006）の手法を用い、マンガ作品を対象として調査・分析を行う。そして、あくまで文末詞という一文法項目に限ってではあるが、それらの使用の特色を明らかにすることで、自然会話とは様相を異にして独自の用法を展開するフィクション作品中の「女ことば」の動態の一端を捉えることに貢献することを目指す。

2. 先行研究

2.1　フィクション作品と「女ことば」をめぐる研究

フィクション作品と「女ことば」をめぐる研究では、ことば使いが登場人物のキャラクタの形成に寄与しているという観点からの研究がしばしば行われている。金水（2003）にはじまる「役割語 [i]」の研究が代表的なものであるが、その他にもドラマを研究対象とした水本他（2006）や、マンガを取り上げた高橋（2009）、

主に洋画の女性登場人物の吹き替えに着目した中村（2013）等があげられる。これら先行研究を概観すると、自然会話においては「死語」とさえされる「女ことば」であったとしても、フィクション作品中では特定のキャラクタを際立たせるため戦略的に用いられているという指摘が見て取れる。

2.2　自然会話における女性文末詞の衰退

1990 年代より自然会話における女性文末詞の衰退についての報告が目立つようになる。これらの研究により、自然会話において衰退傾向にある女性文末詞の形式が明らかとなった。3 世代のことば使いを調査した三井（1992）と小林（1993）、職場における女性のことば使いを調査対象とした尾崎（1997）、中島（1997）や、大学生を調査した小川（1997）という一連の研究をふまえた水本（2005）によって、「わ」・「だわ」・「わよ」・「わね」・「かしら」・「わよ」・「名詞＋ね」・「名詞＋よ」・「のよ（ね）」・「の」（下降調）・「のね」のうち、「の」（下降調）と「のね」以外の女性文末詞は、若い世代―とりわけ 20 代―の女性の間では衰退しているという結果を得た。

2.3　問題のありか

フィクション作品と「女ことば」をめぐる諸先行研究において、自然会話との比較から導き出した「女ことば」の認定基準や調査項目を採用している研究は多くはないという印象が強い。また、定量的な手法を用いた研究例も少なく、感覚的な指摘にとどまるものもある中で、具体的に数値化されたデータとして分析できるフィクション作品と「女ことば」の研究の必要性を感じた。

また「女ことば」の独自のふるまいを明らかにする試みは、「女ことば」を使用している／していないといった断続的観点からではなく、「女ことば」とそれ以外のことば使いを混在させる一人の人物の中で「女ことば」にスイッチする部分に焦点を絞るという連続的観点から調査することによって成しえると考えた。

さらにマンガという媒体は、フィクション作品と「女ことば」をめぐる研究においてしばしば分析対象となりうるが、特に 2000 年代以降の研究例は多くなく、また定量的な手法を用いたものも、管見の限り見当たらない。

以上のことから本研究では、マンガ作品を調査対象とし、さらに自然会話との乖離の有無が明らかにされている「女ことば」の文法－女性文末詞－を調査項目として設定し、定量的な手法を用いて「女ことば」に敢えてスイッチする部分を抜き出し、フィクション作品と「女ことば」をめぐる研究の一端に貢献することを目指した。

3. 調査の概要

3.1　分析の手法――「二項対立表」について

本研究の目的に照らし合わせて、現在もっとも参考となる調査手法は水本他（2006）による「二項対立表」（表 1）を用いたものである。

「二項対立表」とは、2.2 で述べた現代の若年層の女性の自然会話で衰退しているとされる「かしら」「名詞＋ね」「名詞＋よ（よね）」「のよ」「わ系」の 5 形式を項目として定め（女性文末詞の「使用形」）、またそれぞれに対応する女性文末詞の「不使用形」（neutral の形）を示したものである。

この表の優れた点は、「使用形」とそれに対応する「不使用形」という対立項を設けた[ii]ことにより、「女性文末詞が使用される可能性のある文法的環境の中で、どの程度、選択的に使用されたか」という観点を持つことができることである。また、この表によって抜き出された女性文末詞をもとにして「女性文末詞使用率」という概念が導入されていることも利点である。これは文字通り女性文末詞の使用率を示すものであり、登場人物一人一人の使用率を割り出すことができるため、「女ことば」にスイッチする場面に着目するという連続的観点からの分析を目指す本研究において、重要な概念である。

したがって、本研究が目指す女性文末詞にスイッチする場面を抜き出すことにつながるため、この「二項対立表」を調査手法として採用し、またそこから「女性文末詞使用率」を割り出すことには妥当性があると考える。

表１　二項対立表 [iii]

*N：名詞、イＡ：イ形容詞、ナＡ：ナ形容詞、V：動詞、N 型の非活用語：ここでは副詞・助詞の一部

		女性文末詞　使用形	不使用形（neutral）
①	かしら	かしら（ね） 例）だれかしら（ね）	かな・だろう（ね）・ だろうか（ね）・っけ（ね） 例）だれかな だれだろう（ね） だれだろうか（ね） だれだっけ（ね）
②だの使用・不使用で対立	Nね	N　ね　例）子どもね	N　だね　例）子どもだね
		ナＡ　ね　例）すてきね	ナＡ　だね　例）　すてきだね
		ナＡ型活用助動詞の語幹　ね 例）行くそうね　行くみたいね	ナＡ型活用助動詞の語幹　だね 例）行くそうだね　行くみたいだね
		N 型の非活用語　ね 例）これだけね　うそばかりね 福岡からね　なかなか（の人）ね さすが（彼）ね	N 型の非活用語　だね 例）これだけだね　うそばかりだね 福岡からだね　なかなか（の人）だね さすが（彼）だね
	Nよ（よね）	N　よ（よね）　例）あの人よね	N　だよ（だよね）　例）あの人だよね
		疑問詞　よ 例）何よ　どうしてよ　いくらよ 疑問詞　（＋助詞）よ 例）何がよ　誰とよ　何週間かよ	疑問詞　だよ 例）何だよ　どうしてだよ　いくらだよ 疑問詞　（＋助詞）だよ 例）何がだよ　誰とだよ　何週間かだよ
		ナＡ　よ（よね） 例）好きよ　（よね）	ナＡ　だよ（だよね） 例）好きだよ　（だよね）
		ナＡ型活用の助動詞の語幹　よ 例）行くそうよ　行くみたいよ	ナＡ型活用の助動詞の語幹　だよ 例）行くそうだよ　行くみたいだよ
		N 型の非活用語　よ（よね） 例）これだけよ　福岡からよ もちろんよ　さすがよ	N 型の非活用語　だよね 例）これだけだよ　福岡からだよ もちろんだよ　さすがだよ
	のよ	{V　/　イＡ　/　ナＡ　/　N}　のよ 例）するのよ　おかしいのよ いやなのよ　あいつなのよ	{V　/　イＡ　/　ナＡ　/　N}　んだよ 例）するんだよ　おかしいんだよ いやなんだよ　あいつなんだよ
③わの使用・不使用で対立	わ系	わ 例）するわ　しないわ おかしいわ　おかしくないわ いやだわ　あいつだわ	例）する　しない おかしい　おかしくない いやだ　あいつだ
		わね 例）行くわね　来なかったわね いいわね　悪くないわね 無理だわね　学生じゃないわね	例）行くね　来なかったね いいね　悪くないね 無理だね　学生じゃないね
		わよ 例）聞いたわよ　知らないわよ おいしいわよ　見たくないわよ すてきだわよ　花屋だわよ	例）聞いたよ　知らないよ おいしいよ　見たくないよ すてきだよ　花屋だよ

3.2　調査対象とするマンガの選定基準

ドラマ作品を調査対象としている水本他（2006）の調査対象選定基準を参考に、次の 4 つの基準を設け、本稿で対象とするマンガ作品を選定した。

① 20 代もしくは 30 代の女性が主人公であること
② 作品の連載開始年が 2000 年以降であること
③ 時代背景の設定が現代日本であり、物語の内容が現実的で日常的であること（サスペンスやファンタジーを除く）
④ 原作がないこと

これらの条件すべてに当てはまるマンガ作品を 12 作品選定し、各作品 3 巻ずつ選び出し[iv]調査対象とした。

3.3　登場人物数と文末詞数

分析対象となるまとまった発話数を有する若い女性登場人物は、21 名となった。また、マンガ作品特有の事象として、登場人物が他の人物に向けて行う発話（以下、「対人発話」と呼称）と、登場人物が心の内に自分自身に向けて行う発話（以下、「心内発話」と呼称）の 2 種類の発話が認められたため、本研究では発話を「対人」と「心内」に分けて分析を行うこととする。

まず、対人発話における女性文末詞使用形は 398 例、不使用形は 807 例、両者を合計した発話総数は 1205 例となった（表 2）。

次に、心内発話における女性文末詞使用形は 126 例、不使用形は 1639 例、発話総数は 1765 例であった（表 2）。

表 2　対人発話・心内発話内訳

	対人発話	心内発話
使用形	398	126
不使用形	807	1639
発話総数（合計）	1205	1765

3.4　「女性文末詞使用率」に基づくグループ分類

水本他（2006）では「女性文末詞使用率」という概念が導入されている。算出方法は、「女性文末詞の使用形の総数／発話総数（使用形と不使用形の総数）」である。この計算式を用いて、登場人物一人ずつの女性文末詞の使用率を割り出すことにより、本研究で分析対象とすべき女性文末詞の使用形と不使用形を混在させている人物を導き出すことが可能となる。

水本他（2006：62）では、女性文末詞使用率によりドラマの登場人物を以下の3つのグループに分類している[v]。

「多使用型」グループ…女性文末詞使用率50%以上

「時々使用型」グループ…女性文末詞使用率10%～50%未満

「ほとんど不使用型」グループ…女性文末詞使用率10%未満

この分類にしたがい、本研究の21名を分類したところ、多使用型5名、時々使用型11名、ほとんど不使用型5名となった（表3）。多使用型の人物は場面をとわず女性文末詞を使用していると考えられるため分析対象から除外し、女性文末詞にスイッチする場面が見出せると考えられる時々使用型とほとんど不使用型の2グループに属する16名を分析対象とした。

表3　グループ別人数内訳

グループ	人数
多使用型	5
時々使用型	11
ほとんど不使用型	5
計	21

4. 女性文末詞にスイッチする「場面」とは

4.1　マンガにおける「主張度の高い場面」と文末詞

本研究における目的の一つは、フィクション作品において登場人物の発言が女性文末詞にスイッチする場面を導き出すことである。この「場面」に関していえば、とりわけ登場人物が強気な発言をする際や意地悪な態度をとる際に突如として「女ことば」に切替わりが起こる、という諸先行研究に共通する指摘[vi]が存在する。水本他（2006）ではそれらの場面を「主張度の高い場面」（表4）と呼称し取り上げているわけであるが、本研究でもまず、このような場面で女性文末詞が出現しているのか否かの確認、また併せて、出現する文末詞の特色について考察することとした。分析対象となったのは、時々使用型とほとんど不使用型の人物が発話する、対人発話の女性文末詞236例である。

表 4　「主張度の高い場面」の構成要素

①	②	③	④	⑤
主張する・ 言い切る場面	反問、抗議、 つっこみの場面	立場・事情を 説明主張する場面	反論・ 否定の場面	皮肉・嫌味・ 気取りの場面

4.2　場面について

236 例中、93 例が「主張度の高い場面」に該当するという結果になった。場面の数が多い順に述べると、「反問、抗議、つっこみの場面」の 38 例、続いて「立場・事情を説明主張する場面」の 20 例、「主張する・言い切る場面」の 16 例、「反論・否定の場面」の 9 例となり、これら「主張度の高い場面」は主に、「反問、抗議、つっこみの場面」と「立場・事情を説明主張する場面」の 2 場面から構成されていることが読み取れる。

表 5　場面数女性文末詞内訳

場面	主張する・ 言い切る場面	反問、抗議、 つっこみの場面	立場・事情を説明 主張する場面	反論・否定の場面	皮肉・嫌味・ 気取りの場面
かしら	0	0	0	0	1
ね	0	0	0	0	0
よ（よね）	4	21	12	0	1
のよ	3	17	8	0	0
わ	0	0	0	3	2
わね	0	0	0	0	2
わよ	9	0	0	7	3
計	16	38	20	10	9

それぞれの場面における使用例を確認すると、以下の通りである。

4.2.1　「主張する・言い切る場面」

(1)　あいつねー　さいってーな*の*！！

(2)　今　まさに帰るトコ*よ*

(3)　誘ったのはあたしなんだから払う*わよ*

4.2.2　「反問、抗議、つっこみの場面」

(4)　なに勝手に勘違いしてん*の*！！

(5)　（「アンタにしてはマトモじゃない。珍しい」に対して、）マトモって

どーゆーイミよ！？

この場面では疑問詞が共起する使用例が多くみられたが、当然ながら話者は字義通りに疑問を述べるわけではなく、先行発話の内容や聞き手の言動に対して、抗議や不満を表明していることが読み取れる。「なんでよっ！」などという促音の表記や、「！」が付加され、話者の感情の高まりが視覚的に示されていることも、この場面の特徴として見いだせる。

4.2.3 「立場・事情を説明主張する場面」

(6) （「あれ？松方さん　起きてたんすか」に対して）大脳がヤツの話を聞くのを拒否したのよ！！

(7) （「遠慮しないでどんどん飲んで　オレのおごり」に対して」）この一杯で結構よ

先行発話に対する説明になっていること（6）や、先行発話に対する要求反応になっていること（7）が特徴である。とりわけこの場面における「のよ」は、話者が先行発話に対して反発する心情をもち、且つその心情を聞き手が認識すべきと感じていることを強く表明している用法である。

4.2.4 「反論・否定の場面」

(8) （「大暴れすんのやめてよね」に対して）大暴れなんかしてないわよっ！

(9) （「まさかあの子に金せびられてるとかって…」に対して）金くれなんてストレートにいわれたことなんかないわっ！

(10) （自分の交際相手をけなされて）そっ　そんなことないわよっ！

先行発話の内容そのものを含む（8）、または先行発話の言い換えを含む（9）、または先行発話を受けて（10）、それらを「ない」で否定するというパターンがこの場面では確立していることが見て取れる。また「反問、抗議、つっこみの場面」と同じく、促音や「！」が附されていることも多く、話者が高まった心情を包み隠さず露わにして聞き手に伝える様子がよく観察できる。

4.2.5 「皮肉・嫌味気取りの場面」

(11) そいつん家　火つけてやろうかしら　忌ま忌ましい

(12) あらそーお？　聞いてなかったワァ～～～

この場面はもっとも用例数が少ないわけであるが、他の 4 つの場面と比較して、形式のばらつきが多くみられた。その理由としては、「皮肉・嫌味」という他の場面以上に、字義通りではない文脈依存度が高い場面であるためだと考えられる。

4.3　非「主張度の高い場面」の文末詞について

4.3.1　概要

前節までで対人発話の使用形 236 例中 93 例が「主張度の高い場面」に該当したわけであるが、残りは 143 例となり半数以上が非「主張度の高い場面」となるわけであるため、まとまった意味が見出せた用例を、形式別に確認しておく。

4.3.2　かしら

(13)　（夫「ゆっくり決めたらいいよ」に対して）自転車に乗れば　この谷底から這い上がれる*かしら*

(14)　販売員さんを私服にしてオシャレにしたらどう*かしら*

任（2009）によれば、「かしら」は歴史的に「自問」を表すため、質問文に使用された場合であっても聞き手に応答を強制する力は弱いとされる（任 2009：67）。この 2 例の「かしら」も相手に向けて発話されたものであるが、いずれも強い感情や聞き手に対する反発心を含むような「主張度の高さ」は読み取れない。前節で「主張度の高い場面」に分類した「かしら」が、文末詞本来の意味機能から離れて出現しやすい「皮肉・嫌味・気取りの場面」の 1 例のみであったことは、「かしら」のもつ基本的な意味機能と照らし合わせて何ら齟齬のないことだと考えられる。

4.3.3　ね

(15)　ステキなトコロ*ね*ッ

(16)　お肌白くてお母さん似*ね*

(17)　ステキなお店*ね*　接待とかで使うの？

「ね」は「主張度の高い場面」では 0 例であったが、非「主張度の高い場面」では数多く確認できた。

「ね」の基本的な意味機能には「同意要求・同意表明」、「確認要求」、「自己確認」などがあげられるが（宮崎他 2002：277-281）、(15)、(16)、(17) のように、話者の認識を聞き手に対して確認する同意要求としての用法が多くみられた。同意要求を使用して強い主張を行うことはまれであると考えられるため、「主張度の高い」とされる「ね」は現れなかったものと考察できる。またマンガの性質上、登場人物のセリフを通じて読者に状況を伝える必要が多く、ストーリーの背景描写の一環として、同意要求の「ね」を含むセリフが使用されやすいものと考える。

4.3.4　よ

「主張度の高い場面」の「よ」は 38 例あり、「主張度の高い場面」に分類された文末詞としては最多であるが、以下のように、文脈上、主張の程度は高くないと判断できたものもあった。「よ」は、基本的に聞き手に対して用いられ、聞き手が文の内容を認識すべきと話者が考えていることが示されるものであるが（宮崎他 2002：265-266)、前節の「ね」と同じくストーリーの背景描写としての文をセリフ化させる際に、多用されているという印象である。例えば、(18) では勤務先について説明し、(19) では登場人物のプロフィールの説明が行われている。

(18)　地元密着型の都立高校*よ*

(19)　今　大学院生で加々見くんと同じ年*よ*

4.3.5 のよ

(20)　今日　早退して帰ってきた*のよ*

(21)　あたしはねえ　今　高校で養護教諭やってん*のよ*

(22)　稲村のマリンショップで夜だけバイトしてん*のよ*

「主張度の高い場面」と認定された「のよ」は 28 例あり、「よ」の 38 例の次に用例が多くみられる文末詞である。「主張度の高い場面」における「のよ」は聞き手に関して強い感情を含んだ説明の発話となっていたが、非「主張度の高い場面」では、(20)、(21)、(22) のように聞き手に対して単純に説明を述べる文での使用例が見られた。

また、とりわけ「反問、抗議、つっこみの場面」と認定された「のよ」は、疑問詞と共起するものの字義通り疑問を述べるものでなく話者の抗議や不満を示すものであったが、非「主張度の高い場面」では、聞き手に対する疑問を呈している用例が見られた（23、24)。

(23)　あんただってこんな週末にひとりじゃん　彼女はどーした*のよ*

(24)　久しぶりって　何やってん*のよ*三嶋

4.3.6 わ系

(25)　式の日取り決まっちゃったから急に忙しくなってきた*わ*

(26)　先方　相当おかんむりだ*わね*…

(27)　名前は知ってる*わよ*

非「主張度の高い場面」で見られた「わ系」(「わね」・「わよ」含む）も、4.3.3「ね」、4.3.4「よ」と同様、心情を含めストーリー上で必要な情報の羅列をセリフ化する際に使用されているものが多く、本来、登場人物同士のやり取りにおいてはとりたてて口にする必要はない内容とみることができる。したがって、聞き手

は存在するものの話者はこれらの発話にことさら感情をこめたり、主張したりしているとは見られない。

4.4　まとめ

本研究で扱ったマンガのデータにあらわれる女性文末詞の約 4 割は「主張度の高い場面」に該当し、マンガと「女ことば」をめぐる諸先行研究の指摘と同様に、女性文末詞は強い態度で発話を主張する際に一定数偏ってあらわれることが明らかとなった。しかしながら、残る約 6 割の女性文末詞はそれに当てはまるものではなく、マンガという媒体の性質上、ストーリー理解に必要な情報を登場人物のセリフとして発話させる際に用いられているという結論に至った。なお、「主張度の高い場面」と非「主張度の高い場面」のいずれにおいても、使用する際に「女性性」などを強調しているものではないと考える。

5. 女性文末詞の特異なふるまい

5.1　読み手の「笑いを誘う」女性文末詞

前節までにおいて、マンガにおける女性文末詞の傾向を定量的なデータを用いて掴もうとしてきたわけであるが、本節では、量的観点からは捉えづらかった女性文末詞の特異なふるまいについて質的観点から記述する。

女性文末詞が他の「女ことば」同様、何か特定のキャラクタを際立たせる資源として使用されることはすでに述べた通りである。例えば、水本他（水本他 2006：66）では周囲の状況によってセレブを気取る時、女性文末詞にスイッチするというドラマの登場人物が報告されている。本研究においても同様に、登場人物が何かを「装う」場面に女性文末詞を多く認めた。また同時に、これらの場面は、読み手にとって喜劇的な場面であるという共通点を見出した。

(28)　（友人に自慢をしている場面）ホホホ　こんなの序の口*よ*　たいしたことなくって*よ*

(29)　（交際相手が連れてきてくれたホテルを褒める）ステキなトコロ*ね*ッ　あたしもムカシ　こーゆーホテルよく来た*わ*っ

(30)　いえ　なんでもない*わ*　行きましょ

例えば、「こんなの序の口よ」(28) という発話は「ホホホ」という高笑いのオノマトペと「たいしたことなくってよ」という文にはさまれる。この「たいしたことなくってよ」の発話文は、明らかに典型的な「お嬢様ことば [vii]」を意識したものであり、話者はこれらの発話を行うことによって、この場面において戯画的キャラクタである「お嬢様」を演じることとなる。したがって、登場人物のこのような突然のふるまいに、読み手は笑いを誘われる。

また、女性文末詞を使用し喜劇的場面を作り出す例として、「お嬢様」のようなある特定のキャラクタを生み出すことのみならず、登場人物の普段の姿との落差を生み出す例も確認できる。例（29）の発話者は作中で常に「女性らしくない」という設定がなされている。しかしこの場面は、話者がその通常の設定に反し、交際相手に発話する際、意図的に「女らしさ」を演出してみせようと試みるものである。同様に、(30）の話者も普段は女性らしさからはかけ離れた設定の人物であるが、女性文末詞を使用し少し気取った態度を見せている。そもそもこの話者は、女性文末詞使用率の下位グループである「ほとんど不使用型」に属しており、女性文末詞を使用すること自体が殊更めずらしい現象であり、読み手は通常と異なる話者の態度に面白みを感じる。

興味深いことに、こういった喜劇的場面において登場人物が女性文末詞を使用するという「面白み」は、読み手だけに向けられたものであり、作中の聞き手にあたる登場人物は、なんら笑いを誘われていないことに気が付く。これは山口（2005）の唱える「微視的コミュニケーション」（microcosmic communication）と「巨視的コミュニケーション」（macrocosmic communication）の概念と通ずると考える。前者はフィクション作品中の登場人物同士のやり取りを指し、後者は作品の内側から読み手に向けられるやり取りに関するものである。女性文末詞を使用することにより生み出される一連の「笑い」は、作品から読み手に向けられた巨視的コミュニケーションであるといえるだろう。これらの場面において登場人物たちは突如として女性文末詞を使用し、さらにその効果は作中の人物には何ら影響を及ぼさない「不自然な」やり取りを行っているわけであるが、これらは作中の登場人物同士のコミュニケーションを超越したより大きな視点での相互作用を目的としたものであるため、このようなやり取りが許容されているのである。

5.2　心内で「自らに話しかける」女性文末詞

本研究では、女性文末詞を分類する際に、対人発話とは別に心内発話 [viii]のデータも得ることができた。心内発話というマンガ特有の発話において、対人発話の女性文末詞には見られないふるまいが認められたため、本節で詳述する。

心内発話の女性文末詞の中には、登場人物が自らに話しかけ「自分と向き合う場面」で使用されている例が見られた。

例えば（31）では、話者は聞き手に対して事実を誤魔化す発話をしつつも心内ではそれを咎め、さらに自らに名前で呼び掛け、まるでもう一人の人物が話しかけているかのような場面となっている。

(31)　　（「ビールきらいだったの？」と聞かれ）
　　「…えっイヤ　あの……　べ　別に　そんな……」

ご　ごまかしちゃダメよ蛍！　この際サクッとぶっちゃけたほうが…！

その他にも、話者が見合い相手に関して思案する（32）では、女性文末詞を使用し自らを説得している様子が伺える。

(32)　人の　人生キャリアプランを　「ワガママ」のひと言で片付けるよーな奴よ！？　ダメ　惑わされるな！！

これらの使用例から考慮するに、女性文末詞という彼女たちの日常のことば使いから遠いものを利用することによって、登場人物はもう一人の自分を作り出し、自らに語りかけることができるということが認められる。メイナード（2004）は「主体のスタイルの中に、他者の声を招待する」ことを「借り物スタイル」と呼称しているが（メイナード 2004：117)、マンガの登場人物たちは心内で女性文末詞を利用することにより「借り物の声」を作り出すことができ、自らに話しかけることを可能とさせているのである。さらに、この場面での女性文末詞の果たす役割は、登場人物が自らと向き合う場面を生み出し、読者が登場人物の揺れ動く心情を観察できる場を供することであるといえる。

6. おわりに

本研究では、マンガを研究対象とし使用される女性文末詞を分析することによって、フィクション作品と「女ことば」をめぐる研究の一端として、女性文末詞の特有のふるまいを明らかにすることを目指した。その結果をまとめて述べる。

a)　「二項対立表」を用い、マンガにおける女性文末詞の定量的データを得ることができた。そのうち約 4 割の女性文末詞が「主張度の高い場面」に該当し、諸先行研究に指摘があるのと同様に、マンガ作品においても、強い感情を伴う主張の場面が女性文末詞にスイッチする一要因であるということを、ある程度量的に明らかにすることができた。

b)　残る約 6 割の非「主張度の高い場面」の女性文末詞についても併せて考察した。いずれも主張が強いとは感じられない用例であり、とりわけストーリー上必要な情報を読者に提示する際に使用されていると認められるものが多くあった。

c)　その他、量的観点からは捉えづらい女性文末詞の特異なふるまいについて観察することができた。登場人物が女性文末詞を使用して普段と異なる姿を演じ、読者に笑いを供することにより、作品内部のみにとどまらない読者を対象としたコミュニケーションが行われていると考察した。また、女性文末詞の特異なふるまいのもう一つの特色として、登場人物が自らに語

り掛けることを可能とし、読者に登場人物の心情を観察できる場を提供する役割があることを認めた。

注

[i] ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（金水 2003：205）。

[ii] 対立のポイントとなった判断基準は次の通りである（以下、水本他 2006：55-56 より抜粋）。

①　「かしら」における対立形の判断基準

「かしら」文末か、あるいは「かしら」以外の疑問のモダリティ「かな」「だろう」「だろうか」「っけ」文末か。

②　「N ね」「N よ」「のよ」における対立形の判断基準

「だ」（助動詞・形容動詞の語幹）が出現するかしないか（彼よ vs 彼だよ）。同様に「だ」が対立ポイントと認められる、ナ A 型活用の助動詞（そうよ vs そうだよ）、N 型の非活用語（さすがね vs さすがだね）もここに含めた。尚、「N ね」は、文節を区切る「ね」と同型であるが、文末にあっても「～はね」と言えるものは「N ね」とは見なさなかった。

例 1　A：実はね、あの、だめなんだ、プールね。（「プールだね」ではなく「プールはね」を意味する）

③　わ系（「わ」「わね」「わよ」）における対立形の判断基準

終助詞「わ」があるか、終助詞「わ」のない言い切りの文末か。ただし、「わ」は上昇イントネーションのもののみを対象とし、下降イントネーションのものは音声確認を行いながら、本稿では研究から除外した。ここで注意すべきは、「わ」使用形に対立する文末形か、「の」の省略である言い切り文末かという点の見極めである。以下の例のような発話について、文脈から「わ」が接続するか「の」が接続するかを複数人で判定し、前者の場合は抽出して有効発話データとし、後者の場合は今回はノーカウントとした。

例 1　A：はい、プレゼント。　　B：わあ、うれしい。　（←「わ」不使用）

例 2　A：あれからどうしたの？　　B：いろいろあったのよ。C ちゃんが急に気分が悪くなってね、倒れちゃってさ。病院に連れて行かなきゃならなかった。（←「の」が省略された言い切りの文末）

A：え、うっそー。

[iii] 水本他（2006：57）参照。なお、本研究では表中の調査項目「よ」に関して、「よ」のみを調査項目とし、「よね」は除外した。

[iv] 乱数を発生させ、各作品から調査対象とする 3 巻を選び出した。

[v] 水本他（2006）では、ドラマの登場人物たちのデータと、自然会話のデータとの比較から、グループ分類している（水本他 2006：62）。

50％を超す「多使用型」…自然会話の平均値の 10 倍以上

10％～50％未満の「時々使用型」…自然会話にも 4 人いる（すべて 30 代）

10％未満の「ほとんど不使用型」…自然会話とほとんど同レベル

[vi] 水本他（2006）、高橋（2009）、中村（2013）等。

[vii] 『役割語小辞典』には、「お嬢様ことば」を構成する助詞「て」についての項目があり、それによると、このような言葉づかいは 1980 年代以降は作品中ではもっぱら戯画的なキャラクタに限定されたとされている（金水編 2014：129）

[viii] 3.3 節を参照。

[ix] 年数は作品の掲載開始年である。

参考文献

小川早百合（1997）「現代の若者会話における文末表現の男女差」日本語教育論文集小出詞子先生退職記念編集委員会編『日本語教育論文集』凡人社, pp.205-220.

尾崎喜光（1997）「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房, pp.33-58.

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店.

金水敏編（2014）『「役割語」小辞典』研究社.

小林美恵子（1993）「世代と女性語　若い世代の言葉の「中性化」について」『日本語学』12-6, 明治書院, pp.181-192.

高橋すみれ（2009）「挑発する「女ことば」 少女マンガ連載「ライフ」にみる少女の二面性と言語使用」『多元文化』9, pp.95-109.

中島悦子（1997）「疑問表現の様相」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房, pp.59-82.

中村桃子（2013）『翻訳がつくる日本語　ヒロインは「女ことば」を話し続ける』白澤社.

任利（2009）『「女ことば」は女が使うのかしら?　ことばにみる性差の様相』ひつじ書房.

水本光美（2005）「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター　文末詞（終助詞）使用実態調査の中間報告より」『日本語とジェンダー』5, pp.23-46.

水本光美・福盛寿賀子・福田あゆみ・高田恭子（2006）「ドラマに見る女ことば「女性文末詞」　実際の会話と比較して」『北九州市立大学国際論集』4, pp.51-70.

三井昭子（1992）「話し言葉の世代差　終助詞、副詞を中心に」『ことば』13, pp.98-104.

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版.

メイナード, 泉子・K（2004）『談話言語学　日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版.

山口治彦（2005）「語りで味わう　味ことばの謎とフィクションの構造」瀬戸健一他『味ことばの世界』鳴海社, pp162-205.

用例出典[ix]

相原実貴（2010）『5 時から 9 時まで』小学館.　1 巻、2 巻、3 巻

安野モヨコ（2004）『働きマン』講談社.　1 巻、3 巻、4 巻

いくえみ綾（2010）『あなたのことはそれほど』祥伝社.　1 巻、3 巻、4 巻

海野つなみ（2012）『逃げるは恥だが役に立つ』講談社.　1 巻、5 巻、6 巻

北川みゆき（2006）『せいせいするほど、愛してる』小学館.　3 巻、4 巻、6 巻

小林ユミヲ（2009）『にがくてあまい』マッグガーデン．　3 巻、7 巻、11 巻
中原アヤ（2013）『ダメな私に恋してください』集英社．　2 巻、4 巻、5 巻
西炯子（2008）『娚の一生』小学館．　1 巻、3 巻、4 巻
ひうらさとる（2004）『ホタルノヒカリ』講談社．　1 巻、2 巻、3 巻
藤村真理（2012）『きょうは会社休みます。』集英社．　5 巻、9 巻、10 巻
槇村さとる（2006）『Real Clothes』集英社．　2 巻、5 巻、8 巻
吉田秋生（2006）『海街 diary』小学館．　1 巻、5 巻、7 巻

（きたしろ・ともこ　平成二十九年度本学大学院修了生）